

令和4年度 発達障害者支援者セミナー

「発達障害のある子どもとその家族を支援するプログラム

～ペアレント・トレーニングの地域普及をめざして～」 シリーズ 第2弾

子どもの発達を支える効果的な対応


～ペアレント・トレーニングのスキルを教育・保育現場に活かす～



国立障害者リハビリテーションセンター
河内 美恵

講義 1



- ペアレント・トレーニングとは 
- ペアレント・トレーニングのスキルは教育・保育現場でどのように役立つのか



ペアレント・トレーニングのはじまり



- 1960年代から欧米を中心に
- 発達障害圏のみでなく、かんしゃく、破壊的行動、不登校といった非社会的行動、非行などの反社会的行動を呈する子どもなどを対象に、多くのプログラムが開発実践。
- 多くの研究で、親の養育スキルの向上、ストレスの低減、子どもの適応的な行動の獲得、問題行動の改善、発達促進、親子の関係性の改善等が認められている。

我が国のペアレントトレーニング



1999年から始まった厚生労働省精神・神経疾患研究

「注意欠陥/多動性障害の診断・治療のガイドラインの作成とその実証研究」において、ADHDのためのペアレント・トレーニングの開発が、以下の3施設においてスタート

- 国立精神・神経センター(現：国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター) 精神保健研究所 ⇒ 精研式 (まめの木式)
- 奈良県立心身障害者リハビリテーションセンター(現：奈良県総合リハビリテーションセンター) ⇒ 奈良式
- 国立肥前療養所(現：独立行政法人国立病院機構肥前精神医療センター) ⇒ 肥前式

ペアトレ開発が始まって以降の法整備・施策

- 2005年 発達障害者支援法施行、2007年 学校教育法改正により、**本人のニーズに合わせた支援、特別支援教育**が始まる
- 2014年 厚生労働省「発達障害者支援体制整備事業」にて、**ペアトレ**が地域での家族支援の1つとして明記
- 2016年 発達障害者支援法改正により、**家族支援の重要性**の強調
- 2018年 厚生労働省「発達障害児及び家族等支援事業」において都道府県・市町村に対して**ペアトレ**等の推進
- 2021年 障害福祉計画において発達障害支援体制の基本方針の活動指標の一つとして**ペアトレ**が検討
- 2021年 母子保健対策「新たな子育て家庭支援の基盤を早急に整備していくための支援」において、**ペアトレ**等の提供等、親子関係形成支援の推進が挙げられている
- 2022年 児童福祉法改正により、全市町村に「こども家庭センター」と「親子関係形成支援事業」が新設され、**ペアトレを行うこと**が明記されることになった

ペアトレをめぐる現場の声

何をもち「ペアトレ」というの？

ADHDだけでなくASDにも対応できるものが必要

効果はあるの？

地域における普及が十分には進んでいない現状が…

地域にはペアトレを実施する専門職がない

ペアレント・トレーニング実践ガイドブックより

厚生労働省令和元年度障害者総合福祉推進事業

令和元年～2年度

「発達障害における家族支援プログラムの地域普及に向けたプログラム実施基準策定及び実施ガイドブックの作成」研究

一般社団法人日本発達障害者ネットワーク(JDDnet)

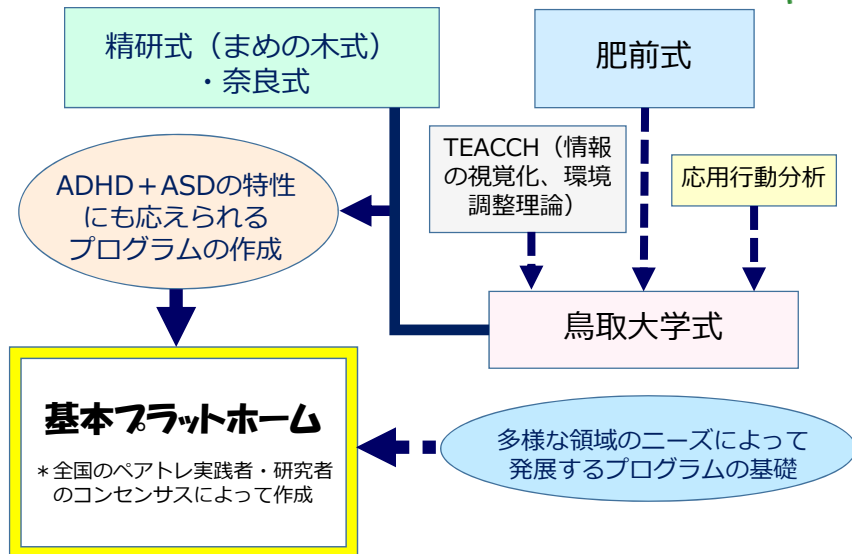
地域でのペアトレ実施の際の道標となるよう、

基本プラットフォーム (ペアトレの必須要素) 明示

- ① コアエレメント (プログラムの核となる要素)
運営上、必要な要件 (グループ推奨・回数・時間・人)
- ② 運営の原則 : 数・期間・フォローアップ・対象者など
- ③ 実施者の専門性 : ファシリテーターに求められるスキル・知識・実施上の注意点

ペアレント・トレーニング実践ガイドブックより

基本プラットフォーム作成の流れ



立正大学名誉教授 中田洋二郎先生 作成版一部改変

ペアレント・トレーニングとは



- 子どもの行動変容を目的として、親がほめ方や指示などの具体的な養育スキルを獲得することを目指す
- 専門家による療育場面などでのトレーニングだけでなく、親が日常生活で子どもに適切に関わることができるようになることで、子どもの行動改善や発達促進が期待できる
- 講義による知識の獲得だけでなく、ロールプレイや演習、さらに家庭で親が実際にやってみることで、日常生活での子どもの行動を変えることにつなげていく
- 少人数の同じ悩みを持つ親や支援者との安心できる場において、悩みを共感し合いながら、プログラムの課題をこなしていくことで子どもの行動改善へのステップを着実に進んでいける

ペアレント・トレーニング実践ガイドブックより

各ペアレント・トレーニングプログラムと基本フラットホームの関係

精研式・まめの木式・奈良式
・肥前式・鳥取大学式

基本フラットホーム
(ペアトレの必須要素)

コア・エレメント

子どもの好ましい行動を見つけ、その行動をほめる

子どもの行動を理解する(ABC分析)

子どもの行動を3つのタイプに分ける

コアエレメント

環境調整行動が起きる前の工夫

子どもが従いやすい効果的な指示の出し方

子どもの好ましくない行動への否定的な注目を取り去り「待つ」

ペアレント・トレーニング実践ガイドブックより一部改変

令和元年～2年度 「発達障害における家族支援プログラムの地域普及に向けたプログラム実施基準策定及び実施ガイドラインブックの作成」研究 一般社団法人日本発達障害者ネットワーク(JDDnet)

成果物

令和元年度：
「ペアレント・トレーニング実践ガイドブック」
令和2年度：
「ペアレント・トレーニング支援者マニュアル」



研修動画・資料

令和4年2月11日開催発達障害支援者向けセミナー
「発達障害のある子と家族を支援するプログラム～ペアレントトレーニングの地域普及をめざして～」

⇒ 発達障害ナビポータル

⇒ 「研修コンテンツ集」⇒ 「ペアレントトレーニングの地域普及をめざして」

https://hattatsu.go.jp/training_video_distribution/parent_training_overview/

ペアレント・トレーニングの技法を 教育・保育現場に活かす①

- 1999年より精研にてペアトレ開発に携わる
- 2001年頃より、教育・保育現場から「発達障害」についてのニーズの高まり
- 具体的な対応方法の一つとして
「**ペアレント・トレーニング**」のスキルを紹介
= 学習理論に基づく行動療法にのっとったプログラム
= 教育・保育現場で日常的に用いられている手法の1つ
(例：はなまる✿・ポイント制など)

教育・保育現場でペアトレ
のスキルは役に立つ！

自分(支援者)も
ペアトレを受けたい！！

ペアレント・トレーニングの技法を 教育・保育現場に活かす②

- 2006年 小学校の先生方と教育現場での実践を開始
⇒ 支援者向けペアトレ「ティーチャーズ・トレーニング (以下、ティートレ)」を開発
- 2007年 M市公立保育園でティートレの実践を開始
- 2010年 都内児童精神科クリニックにてティートレ開始
- 現在までに、小・中学校・保育園・幼稚園・療育現場・
放課後デイサービス・医療現場(医師・心理士を含めたコ
メディカル)等の職員の方々を対象に支援者に向けてペ
アトレ・ティートレを実践

【セッション構成】

精研式ペアトシを教育・保育・福祉現場向けに修正

回数	ペアレント・トレーニング(10回)	回数	ティーチーズ・トレーニング(6回)
1	親子の悪循環・行動のABC・ 環境調整・ 行動とは・行動を3種類に分ける	1	大人と子どもの悪循環・ 行動のABC・環境調整・ 行動とは・行動を3種類に分ける
2	肯定的な注目「ほめる」を与える	2	肯定的な注目「ほめる」を与える
3	戦略的な無視①～無視のコツ～	3	戦略的な無視①～無視のコツ～
4	戦略的な無視②～ほめると無視の 組み合わせ・アクションプラン～	4	戦略的な無視② ～ほめると無視の組み合わせ～
5	効果的な指示の出し方①	5	効果的な指示の出し方①②
6	効果的な指示の出し方②	6	まとめ
7	よりよい行動チャート(BBC)		
8	制限を設ける		
9	学校との連携		
10	まとめ		

支援者向けペアレント・トレーニングの効果の検討

【目的】 保育士・幼稚園教諭を対象とするペアレント・トレーニング（ティーチーズ・トレーニング）の効果を測る

【対象】 2010年～2012年に、MAクリニック、ならびに東京都M市公立保育園研究会で実施したティートレ(8グループ)に参加し、研究趣旨に同意した保育士53人、幼稚園教諭22人、計75人(女性72人、男性3人)

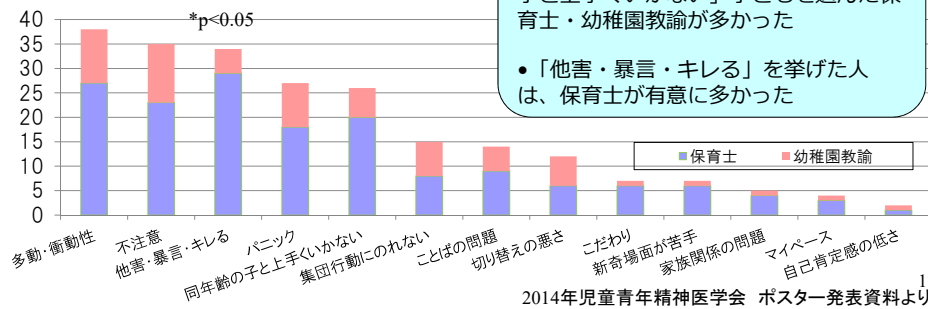
【方法】 参加者には「対応が難しい」と感じる子ども(対象児)を1人選び、ティートレで学ぶスキルを用いて約半年に渡って対応してもらった。プログラム実施前後に自記式のアンケートを行い、参加者の年齢・性別・経験年数・担当クラス、対象児の年齢・性別・特徴、保育・教育への自信度(17項目・11件法)、ティートレの有用性とその具体的内容、ティートレの難しさとその具体的内容、感想を調査した。

2014年児童青年精神医学会 ポスター発表資料より

【結果】 1. 基礎データ

	全体	MAクリニック	M市保育園
参加人数	保育士53人・幼稚園教諭22人・計75人	保育士19人・幼稚園教諭22人・計41人	保育士34人・幼稚園教諭 0人・計34人
年齢	平均37.5歳・SD=11.2歳(21歳～62歳)	平均38.3歳・SD=12.1歳(21歳～62歳)	平均36.5歳・SD=10.2歳(23歳～59歳)
経験年数	平均14.2年・SD=10.5年(1年～40年)	平均13.3年・SD=10.3年(1年～40年)	平均15.3年・SD=10.7年(1歳～39年)
子どもへの関わり	担任64人・介助4人・その他8人	担任30人・介助3人・その他8人(園長、巡回等)	担任34人・介助1人
対象児年齢	平均3.8歳・SD=1.1歳(1歳～6歳)	平均4.0歳・SD=1.1歳(2歳～6歳)	平均3.4歳・SD=1.0歳(1歳～5歳)

2. 対象児の特徴 (重複回答あり)



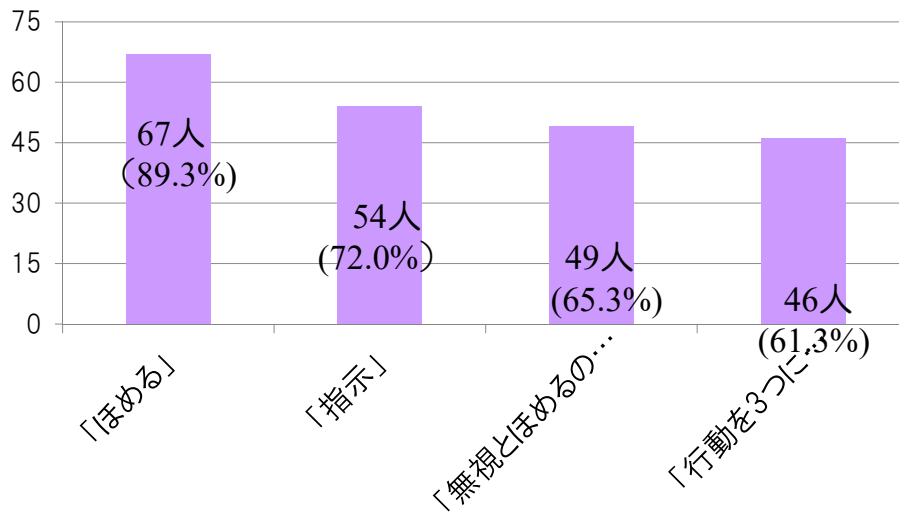
3. 保育・幼児教育への自信度 (分散分析結果)

11件法 : 「0」まったく自信がない～「10」絶対に自信がある	プログラム前後×職種			プログラム前後×実施箇所			プログラム前後×年齢YO			プログラム前後×経験年数		
	TTP前後	職種	交互作用	TTP前後	実施箇所	交互作用	TTP前後	年齢YO	交互作用	TTP前後	経験年数	交互作用
1. 対象児の成長をあせらずに見守る	A**			A**			A**	O*	A・Y*	A**		
2. 対象児の発達上の難しさを受容する	A**			A**			A**			A**		
3. 対象児ができることをやらせる	A**	幼**		A**	CL*		A**			A**		
4. 対象児を1日1回以上ほめる	A**			A**		A・M*	A**			A**		
5. 対象児がリラックスできる場を作る	A**			A**			A**	O**		A**		
6. 対象児の仲間作りを助ける	A**			A**			A**			A**		
7. 対象児の問題行動に対応する	A**			A**			A**	O*		A**	L*	
8. 保護者に対して適切に対応する	A**			A**			A**	O*		A**	L*	
9. 自身(支援者)を責めることを減らす	A**			A**			A**			A**		
10. 自身(支援者)の不安を減らす	A**			A**			A**	O*		A**	L*	
11. 職員間のトラブルを減らす	A*			A**			A**			A**		A・S*
12. 援助を他の職員にも行ってもらう				A*			A*			A*		
13. 心配事を他の職員に相談する		幼**		A*			A*			A*		
14. 同様な職員と気持ちを共有する	A**			A**			A**	O**		A**	L*	
15. 必要時に他専門機関を利用する	A**			A**			A**	O**		A**	L**	
16. 対象児の行動、考えが理解できる	A**			A**			A**			A**		A・S*
17. 対象児と一緒に楽しい	A**			A**			A**			A**		

**p<0.01, *p<0.05 P: TTP実施前, A: TTP実施後 保: 保育士(53人), 幼: 幼稚園教諭(22人) CL: まめの木クリニック(41人), M: M市保育園(34人)
 Y: 38歳以下(35人), O: 39歳以上(40人) S: 経験年数12年以下(37歳), L: 経験年数13年以上(38人)

2014年児童青年精神医学会 ポスター発表資料

4. 保育・教育に役立っているスキル (重複回答あり)



2014年児童青年精神医学会 ポスター発表資料

「ほめる」はどのように役立っているか (重複回答あり)

保育士・幼稚園教諭自身の変化

- ・ 「ほめる」コツやバリエーションが身に付いた(15人)
- ・ 子ども達を肯定的に見られるようになった(7人)
- ・ 子どもが嬉しそうに動く瞬間、自身もうれしくなった(1人)

関係性の変化

対象児との関係が良くなった(7人)

子どもの変化

- ・ 対象児以外の好ましい行動が増え、クラス運営がスムーズになった(13人)
- ・ 対象児の好ましい行動が増えた(11人)
- ・ 対象児の表情が良い・嬉しそう(6人)



2014年児童青年精神医学会 ポスター発表資料より

「効果的な指示」はどのように役立っているか

(重複回答あり)

保育士・幼稚園教諭自身の変化

- 指示のバリエーションが増えた(24人)
- 指示を出す際の自身の意識が変わった(伝わりやすい適切な指示を見極め、出すようになった(14人)
- 自身の心に余裕ができる(1人)

関係性の変化

子どもと気持ちの良い関係でいられる(1人)



子どもの変化

対象児が指示の理解がしやすくなり、スムーズに次の行動に移りやすくなった(20人)

21
2014年児童青年精神医学会 ポスター発表資料

「戦略的な無視とほめるの組み合わせ」はどのように役立っているか

(重複回答あり)

保育士・幼稚園教諭自身の変化

好ましくない行動が気にならなくなり、気持ちに余裕ができた(6人)

関係性の変化

悪循環が減り、良い循環が増えた(8人)



子どもの変化

- 好ましい行動が増えた(5人)
- 好ましくない行動が減った(4人)
- 子どもが自ら気づき、自分で動くようになった(3人)

22
2014年児童青年精神医学会 ポスター発表資料

「行動を3つに分ける」は どのように役立っているか (重複回答あり)

保育士・幼稚園教諭自身の変化

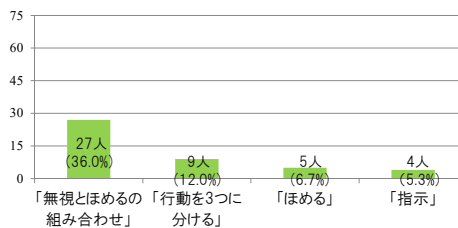
- 対象児の行動を整理して見られるようになった(13人)
- 対象児を叱る・怒ることが減った(8人)
- 対象児を理解することができるようになった(7人)
- 好ましい行動に目が行くようになった(7人)
- 子どもの行動の前後などを分析することができるようになってきた(3人)
- 自身の気持ちが楽になった(1人)
- 子どもの反応が楽しくなってきた(1人)



2014年児童青年精神医学会 ポスター発表資料より ²³

5. 使いにくい・分かりにくいスキルは (重複回答あり)

- 「無視とほめるの組み合わせ」が27人(36.0%)と最も多かった



- どのように使いにくい・分かりにくかったか;



- つい反応してしまう(6人)
- 「無視」や「無視」の後の「ほめる」タイミング(5人)
- 「好ましくない行動」が「危険な行動」につながってしまう時(4人)
- 「無視」への抵抗感(2人)
- 「無視」そのものへの理解(2人)
- 集団の中で「無視」をすること(2人)

2014年児童青年精神医学会 ポスター発表資料 ²⁴

6. その他の感想(重複回答あり)

* 実際の保育・幼児教育において 活かされたこと・うまくいったこと・子どもの良い変化、等

- ・ 保育・教育技術・態度の向上(18人)
- ・ 対象児をより肯定的に見ることができるようになった(12人)

- ・ 対象児の「好ましい行動」が増えた(21人)
- ・ 他の子ども・クラス全体にも有効(20人)
- ・ 対象児の自己有能感の向上(11人)

- ・ 対象児との関係が良くなった(12人)



* 保育・幼児教育場面で、やりにくかったこと・難しかったこと、等

- ・ 他職員とのティートレスキルの共有・連携(12人)
- ・ 子どもの特性(危険な行動が多い、発達の遅れ、反応が乏しい、パニックになりやすい、など)によって(9人)
- ・ 集団の中での実践(8人)

2014年児童青年精神医学会 ポスター発表資料

支援者向けペアレント・トレーニング研究結果

- 保育士・幼稚園教諭と対象児との関係が改善された
- 子どもに好ましい変化（好ましい行動が増えた・好ましくない行動が減った・表情が良くなった・指示理解がスムーズになった、等）が認められた
- 職種・実施箇所・経験年数・年齢に関わらず、保育士・幼稚園教諭の保育・幼児教育に関する自信度が有意に向上した
- 役立つスキルとして「ほめる」を約9割の保育士・教諭が挙げており、最も多かった。ついで「指示」「無視とほめるの組み合わせ」「行動を3つに分ける」が続いた

2014年児童青年精神医学会 ポスター発表資料より

- プログラムを通して「対象児を理解する」「子どもを肯定的に捉える」「好ましくない行動が気にならない」「気持ちに余裕ができる」「伝わりやすい指示を意識する」ことができるようになった、等と感ずるようになった保育士・教諭が少なくなかった
- 対象児にスキルを用いて対応することで、クラス運営がスムーズになる等、集団への効果が認められた。一方、集団ならではの難しさを感じる支援者もいた
- 他職員とスキルの共有が課題
- ペアトレ・ティートレは万能ではありません。子どもの特性によっては、ペアトレ・ティートレだけではなく、特性にあわせた対応を取り入れましょう

27
2014年児童青年精神医学会 ポスター発表資料より

職場で、地域で、仲間を作って、
子どもの反応を楽しみながら
ペアレント・トレーニングのスキルを
支援に活用していきましょう！！



ご清聴ありがとうございました

